

※本紙の英語版・中国語版・韓国語版・フランス語版は、当協会HPからダウンロードできます。

(財)福島県国際交流協会 平成23年8月10日発行号

この度の東日本大震災により被災された方々に、心よりお見舞い申し上げるとともに、一日も早い復興をお祈りいたします。福島県の今の暮らしをお伝えします。



福島の今



尾瀬沼でハイキングを楽しむハイカー
(桧枝岐村 2011.7.14 撮影)



今が旬の桃の販売
(伊達市 2011.7.27 撮影)



わらじまつり
(福島市 2011.8.6 撮影)



福島からの声

鈴木恵子さん (広野町 女性)

“疲れた”というのが今の実感。私が住んでいた広野町は原発から約25kmです。放射線の影響で自主避難を余儀なくされました。震災直後は小野町に避難し、その後県内の親せきの家を転々とする生活をしています。この間に90歳の母が震災のショックで亡くなりました。先日一晩だけ広野の自宅に戻りました。ここは立ち入り禁止区域の方々の一時帰宅の際の中継地になっているので、行政、医療、警察、電力会社などの人や車両がたくさん出入りしていて何とも言えない異様な雰囲気を感じました。震災後5か月になろうとしています。一度もぐっすり眠った気がしません。今は、何かやっていないと無気力になってダメになりそうなので、孫の世話やボランティア活動に精を出しています。

高松トヨさん (伊達市 女性)

今年72歳になりますが、この年になると放射線の影響もあまり考えないほうがいいかなと思っています。放射線の心配によるストレスを考えると、どっちが体にいいかしらね。それにしても原発事故直後の2~3日間は、たくさん放射線が放出されたと思うのですが、その時は多くの方が水をもらう為に外に並んでいたはず。私もその一人ですから。国がパニックを恐れてだかんだかわかりませんが、その時もっと情報を流してくれたなら、不要な被ばくはある程度避けられたと思うんです。このことはとても残念ですね。ともかく、今は心配しすぎてストレスを溜めることなく、前向きに楽しく生きることだけ考えています。

ルイス グスターボ オリベiraさん (福島市 ブラジル出身男性)

私には、昨年12月に生まれたばかりの娘がいます。震災当時、電気・水道・ガスが止まり、店も閉まっていたのでミルクやおむつが手に入らず、妻もストレスで母乳が出なくなりました。原発事故後、1か月半ほど妻の実家のニュージーランドに避難していましたが、今は普通の生活に戻ってそれなりの生活をしています。娘を肩車して散歩するなど自由に外で遊べないのがとても残念です。そして今は桃が旬。福島の桃は大好き、世界一です。でも食べることに抵抗があります。私も農学部出身なので農家の人の気持ちはよくわかりますが…。このような状況でもよくなることを信じて、希望を持って毎日を過ごしています。

ジーン・リュさん (新地町 アメリカ出身男性)

3月11日の震災後、私の生活が劇的に変わったとは思いません。もちろんいろいろなことで不便はあるものの、周囲の人たちの最悪の状態を知っても不平不満を言うつもりもないです。今、生きている自分が幸運だと思うからです。変わったのは私の人生に対する見方そのものです。

この福島が災難から目を背けるのではなく、ひとつになって復興へ立ち向かっている姿に驚きを感じています。また、福島県内のALT(英語指導助手)の仲間たちが行っている支援活動に対して改めて敬意を示すとともに、その行動力にとっても感動しています。

発行者

(財)福島県国際交流協会 〒960-8103 福島県福島市舟場町2-1

☎024-524-1315 FAX 024-521-8308 E-mail info@worldvillage.org URL http://www.worldvillage.org